

吉野準

ある

警視總監

日記

新潮社

吉野準

ある

警視総監

日記

新潮社



けいし そうかんにつ き
ある警視總監日記

よしの じゅん
吉野 準

発行——1996年9月15日

発行者——佐藤隆信

発行所——株式会社新潮社

〒162 / 東京都新宿区矢来町71 / 振替 00140-5-808

電話——編集部 03・3266・5411
読者係 03・3266・5111

印刷所——株式会社三秀舎

製本所——加藤製本株式会社

価格はカバーに表示してあります。

© Jun Yoshino 1996, Printed in Japan

ISBN4-10-413501-1 C0095

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛お送り
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

ある警視總監日記

*

目次

第一章 爽気

ブレリユード 11

長所は合理主義、短所も合理主義 14

肩の力を抜け 19

総監、交番はもつと気働きをして下さいな 23

一期一会 26

ボリス・エリツィン大統領とラーメンスキー・ヨシノビッチ総監
あえて都県境を越える 40 34

日記の余白 ① 現代の考証

ロンドン警視総監の来日 44

鼻をつまんだ美人女優 46

枕の下チップ 47

貴殿はなにゆえ前を隠さざるや 49

推理作家は事件の筋が読めるか 51

取調室の電気スタンド 54

ころのトラブル 57

戦場の花から実戦力へ 62

第二章 木枯らし

世の中、思いもよらぬことが 66

文化村 68

風疼く 71

全員野球 73

日記の余白 ② 異国隠密術

スパイものがたり

第三章 雲

みぞれ

胸の中まで冬景色 98

ウーマン・パワー煌めく 103

捜査は全速前進
106

日記の余白 ③ マルクスの呪縛

東ベルリンの一夜
113

天井に狙撃兵が
117

禁忌
119

助けてくれー
120

弁慶号の撮影もご法度
122

おめでたい大統領
124

左翼ヤクザ
127

化石を砕いて舐めるような
129

カチューシャ
131

予言者・チャイコフスキー
134

第四章 春風

日章旗と太極旗
138

会社暴力ホットライン

144

若い力

147

陣を立て直す

153

春は泣いている

160

日記の余白

④ 二を知らぬなり

幹部の溜息

167

これがスリの指ですよ

169

便所の蓋

171

オカマの告げ口

174

内科の警察

177

座学では習わない話

181

芸を盗む刑事

184

法律症候群

188

踊り子には問題ないぜ

190

羊羹と豆腐 192

幽霊が足を引っ張る 194

第五章 夏雲

交番文化 197

祭の季節 210

先人の心意気 214

日記の余白 ⑤ 南海の砂

疑惑の影 223

ダゲウツド・サンドイツチ 225

どうしていいかわからない署長 227

夢の中でもがくような 230

お通夜 234

告白 237

第六章 秋のいろ

妻あり子あり友ありて

239

ロマンなり警視庁

242

あとがき

252

装画 * 志賀功

装幀 * 新潮社装幀室

ある警視總監日記

第一章 爽気

プレリユード

平成五年九月十日（金）

七時起床。数日前からの風邪もどうやら治まったようで一安心。朝食後、ギターをとってバッハのプレリユード（前奏曲）を一曲さらう。

九時半、警察庁次長室へ最後の出勤。

警視總監は誰が任免するのか——という問題は、クイズとしてかなり難かしい部類に入るのではないか。「国家公安委員会が都公安委員会の同意を得た上内閣総理大臣の承認を得て、任免する」（警察法）というのが答え。

十一時過ぎ、大臣室。国家公安委員会を代表する佐藤委員長（自治大臣兼務）から「警視總監に任命する 国家公安委員会」との筆書き辞令を受ける。

城内警察庁長官に挨拶、職員の方々の見送りを受けて警察庁を後に。

警視庁正面で車を降りると、儀仗隊が整列している。号令と敬礼と小太鼓の響き。

十一階総監室隣の応接室に入り、制服に着替える。いつもは私服だが、今日のような就任行事の時は制服となる。もともと行事の前に今日は東京都公安委員会の定例会がある。河野委員長及び四人の委員の方々に挨拶した後、会議に入り、関係部長から報告。

終って総監室に入り、安藤前総監と事務引継式。カメラのフラッシュが続く。

昼食後、所属長（署長、本部の課長・隊長など）以上の幹部が次々と入室して挨拶。流れ作業で要領よく進められるが、それでも二十分かかる。

第七十九代警視総監として就任挨拶をする時がきた。十七階でエレベーターの扉が開くと、むこうから警視庁音楽隊の演奏する行進曲が響き出す。一呼吸おいてから足を踏み出し、大会議室へ向かう。

壇上からは、眼前に整列する幹部諸氏だけではなく、四万四千人の全職員を念頭において挨拶。レイモンド・チャンドラーの小説『プレイバック』の一節を引きながら、強く、しかも優しい人こそ私の理想とする警視庁人像であります」と呼びかける。

三時過ぎ、記者会見。総監就任に当たった重点方針として、暴力団の徹底的取締り、交番の機能強化などをあげる。

引続き、安藤前総監の歡送行事。この人とは学生時代からの長い付き合いで、公私共に世話になった。正面玄関で「蛍の光」が流れる中、固く握手。「後を頼みます」「引受けました」。

夕刻、首相官邸へ。総理大臣、官房長官、官房副長官に挨拶。続いて新宿の都庁へ。都知事、副知事に挨拶。午後七時、帰宅。長い一日だった。

爽やかなこの道のあり旗掲ぐ

九月十一日（土）

休日。早朝、街を歩くといつもの風景が一変したような妙な感じ。散歩のお年寄り、ジョギングの外国人、急ぎ足のビジネスマン——この人たち全員の安全について自分に責任があるのか。「電信柱が高いのも郵便ポストが赤いのも、みんなわたしが悪いのよ」という台詞を思い出した。われながら少々気負い過ぎか、と可笑しくなる。

帰宅後、北海道の実家と、都内の妻の実家に電話。喜んでくれる。この年で双方の両親が健在とは、ありがたいことだ。

九月十二日（日）

来状を読む。様々な人からの御祝意。思いがけない人からのもある。

中に、むかし御指導いただいた警視庁幹部OB氏からの苦言あり。私が新聞インタビューで警

視庁を戦艦大和に例えたのはいかなものか、という御趣旨。御意見として承っておく。

しかし大組織として小回りがきかない短所と、動き出せば大威力を発揮する長所をあわせ持つというのは事実だと思うのだが。因みに、吉田満著『鎮魂戦艦大和』は私の愛読書である。

長所は合理主義、短所も合理主義

九月十三日（月）

午前中、関係先に挨拶回り。

昼、登庁。一息入れて十一階総監室から窓の外を眺める。眼下にお濠が横たわりその先には大内山の緑が広がる。左手半蔵門方向からは車の帯がゆつくりと流れている。警視庁勤務は十四年ぶり。新庁舎になってからは初めてだ。

午後、一回目の部長会議。

構成は、副総監兼警務部長を初め、総務・交通・警備・地域・公安・刑事・防犯・通信の各部長と警察学校長。警視庁を動かす最高会議だ。

皆よく知った仲ではあるが、冒頭少し改まって発言。自分のことを「長所は合理主義。短所も